

巻頭言

巣ごもり時代の文学

名古屋大学 国際教育交流センター長

長 畑 明 利

1.

1年前、2020年度の春学期は、新型コロナウイルスの影響で開始が遅れ、授業は対面ではなくオンラインでの実施となった。初めてのことで試行錯誤を繰り返しつつも、何とか学期を終え、夏期休暇を迎えることができた。その頃までには、緊急事態宣言の効果も出たらしく、新規感染者も減り、コロナ禍はこのまま終息していくのではないかという楽観論も聞こえてきた。しかし、実際にはそのようなことはなく、人の行き来が戻ればすぐに感染者数が増加し、新たな緊急事態宣言が（あるいは、まん延防止措置が）発令されることとなった。

海外では、日本よりも厳しい感染予防策がとられた国もあった。店舗は閉じられ、人々の外出時間が制限される場所もあった。しかし、しばらくして、いくつかの国でワクチン接種が始まり、また、それらの国よりはかなり遅れたものの、日本でもワクチン接種が始まった。ワクチンによって、今度こそコロナ禍は終息に向かうのではないかという期待も抱かれた。しかし、実際は、デルタ株をはじめとする変種が猛威をふるい、またワクチンを接種した者が感染するといった事態も起きて、2021年の夏になると、海外の国々も、また日本も、新たな感染の波に見舞われている。パンデミックの終息がいつになるのか、見通しが立たない状態である。

2.

こうした新型コロナウイルスまん延の影響で、多くの人が多かれ少なかれ経験したのが移動の制限である。多くの大学や初等中等教育の現場で授業がオンライン化され、企業でも在宅勤務が奨励された。人との接触を断つことによって、ウイルス感染を防ぐ必要があることからすれば、人の移動を制限するのは理にかなったことだが、家でじっとしていることはしばしば苦痛を伴う。コンピューターの前に一日座って仕事を

していると、足腰が弱ることもあるし、視力が衰えることもある。心理的影響も懸念される。名古屋大学学生支援本部が学部1年生に対して行った調査によれば、2020年度は春から秋にかけて抑うつや不安を自覚する学生の数が増したという。（2021年春には回復傾向にあることが示されている。）

抑うつや不安の原因は新型コロナウイルスに関係するものばかりではないかもしれないが、ウイルスのまん延がもたらした例外的状況が学生の不安や抑うつ増加に結びついている可能性はありそうである。また、抑うつや不安とは別に、ウイルス対策によってもたらされた自由の阻害は、学生に限らず、多くの人に欲求不満を募らせることになっただろう。日本よりも厳しい移動制限が敷かれた海外の国々で、それはさらに強かったに違いない。

3.

ときに「巣ごもり」と呼ばれたこうした状況への対処の仕方は人によって異なるだろうが、ここで取り上げたいのは読書である。日本では、コロナ禍の間に、書店の売り上げが急増したとするニュースが流れた。NHKによれば、2020年の紙と電子の書籍の合計推定販売額は前年比4.8%増となり、とりわけ電子書籍は28%増となったという（「コロナ禍で本の需要高まる」2021年1月26日）。また、書籍の売り上げではないが、コロナ禍において、無料で著作権の切れた文学作品を読むことのできるインターネットのサイト「青空文庫」の人气が高まっているという報道もあった（「在宅者増え、青空文庫に脚光」『毎日新聞』2020年6月2日）。

同様のニュースは海外からも聞こえてきた。（以下、英語圏の例を紹介する。）イギリスの『ガーディアン』紙（2021年1月25日）によれば、2020年の印刷本の売れ行きは2019年を5.2%上回ったと推定されるというし、合衆国でも2020年に印刷本の売り上げは前年を8.2%上回ったという（NPD.com, 2021年1月7日）。外出

が制限され、自宅で長時間を過ごさなければならなくなった人々が、それまで通勤に費やしていた時間の一部を読書にあてたとしたら、それは出版社、著者、書店に加え、教育関係者にとっても喜ばしいことであっただろう。

読まれた本のジャンルは様々であるようだが、文学作品に手を伸ばした人も少なからずいたものと思われる。実際、書籍ではないが、アメリカを中心に詩人や詩を紹介するインターネットのサイト *poets.org* は、2021年の1月に通信量が前年の3月から25%増加したという (Morgan Hines, “Renaissance Is upon Us,” *USA Today*, 2021年2月8日)。戸外で他者と交流する機会を奪われた人たちが、小説や詩などの文学作品によって、心のバランスを保つということもあっただろうし、急に本を読む時間ができて、これまで読めなかった作品に挑戦してみたという人もいたものと思われる。

危機や困難、あるいは失意の時に、人は文学に向かうと言われるが、それは現在のパンデミック状況下の世界にも当てはまるのかもしれない。とりわけ、新型コロナウイルスに感染し、重症化の後に命を落とした人が続出した国では、近い人の不幸がもたらす喪失感を癒すものとして、文学作品の需要が高まった可能性がある。メディアでは、詩を治療の補助として用いるという精神科医も紹介されている (Jane E. Brody, “When the Doctor Prescribes Poetry,” *The New York Times*, 2021年4月12日)。また、アメリカの詩人たちがパンデミックへの反応を綴った詩を集めたアンソロジーも出版された (Alice Quinn, ed., *Together in a Sudden Strangeness: America’s Poets Respond to the Pandemic*)。本書は2020年の3月にE-bookとして出版された後、さらに作品を追加して紙の本としても出版されたものだが、タイトルはチリの詩人パブロ・ネルーダの詩 “A Callarse” (英訳 “Keeping Quiet”) からとられている。

失意の人を励ますという目的とは異なるが、作家や出版社、あるいは、文学愛好家の側から、ロックダウンあるいは自粛生活中の人々に、文学作品に親しむ機会を提供しようという試みもある。SNSを用いたものでとりわけ注目を集めたのは、『新スタートレック』シリーズのピカード艦長役などで知られるイギリスの俳優パトリック・スチュワートが、シェイクスピアのソネット (14行からなる詩) を毎日1篇朗読し、コメ

ントするビデオを投稿した例である。シェイクスピアの『ソネット集』は154篇からなるソネット連作だが、スチュワートは2020年の3月から同年10月にかけてその朗読を行った。多くのファンが彼の投稿を視聴した模様で、彼が最初に朗読ビデオを投稿した際には (116番を朗読した)、45,700回以上の視聴が記録され、3,800件以上のコメントが書き込まれたという。その反応に力を得て、スチュワートは1番から順にソネットの朗読を行った (“Hear Daily Sonnets Recited by Patrick Stewart,” *Smithsonianmag.com*, 2020年4月7日)。現在、この朗読ビデオはYouTubeでも視聴することができる (“A Sonnet a Day by Sir Patrick Stewart,” YouTube)。

コロナ禍においては、オンラインの読書会の人気も増した。Zoomなどのオンライン会議用のアプリケーションを用いて、様々な本について意見交換する催しである。また、オンラインの朗読会も増えているようである。アメリカなどでは、新刊書が刊行されると、本の販売促進のために著者が各地の書店で朗読会を開催することが多いが、コロナ禍の影響で、これをオンラインで行うことが増えた。各地の書店で、作家たちの新刊書のヴァーチャル朗読会が開かれ、読者がそれらに参加するということが起こっているという (Liz Newman, “A Year of Poetry in Lockdown,” *read poetry*, 2021年3月23日)。

4.

詩や文学作品を読んだり聞いたりするだけではなく、自ら創作を行い、それを発信することにもあらたに注目が集まっている。英語圏では「ポエトリー・スラム」という詩の朗読 (もしくはパフォーマンス) を競うコンテストが盛んだが、コロナ禍においても、世界各地で様々な催しが行われている。初等中等学校の行事として行われたものもあれば、出版社主催のものもあるが、その中には、「ロックダウン・ポエトリー・スラム」や「スラム・ポエトリー・アゲinst・コロナウイルス」 (Slam Poetry against Covid 19) といった名前をつけられたものもあった。それぞれの催しのコロナ禍に対するスタンスは様々であり、(元気よくパフォーマンスをすることで) コロナに打ち勝つというメッセージを発するものもあれば、コロナ感染予防のための啓発的メッセージを発するものもある。

一方、パンデミックの最中にオンラインの創作グ

ループが活況を呈しているという報道もあった(“Still Stuck at Home? It Might Be Time to Work on That Novel,” *The New York Times*, 2021年3月18日)。外出・移動が制限された際に、もともと創作に関心があった人たちの中には、家に閉じこもる状況を利用して創作に向かった人もいた。外出して人と話すことができなくなった代わりに、家で過ごす静かな時間が増え、その時間を創作あるいは思索のために用いることができるようになったというのである。

創作を啓発活動と結びつける試みも行われている。ワクチン接種に関する啓発を目的とした「グローバル・ワクチン・ポエム・プロジェクト」(Global Vaccine Poem Project)はその一例である。これはケント州立大とアリゾナ大学それぞれの詩に関するセンターが共同で運営するプロジェクトで、世界中の人々に「〈親愛なるワクチン〉詩」(“Dear Vaccine Poem”)を書こうと呼びかけるものである。参加者は、パレスチナ系アメリカ人詩人で「若者のための桂冠詩人」(Young People’s Poet Laureate)に任命されているネオミ・シーハブ・ナイが書いた「親愛なるワクチン」という詩——ワクチンに呼びかける形で書かれている——を

参考にして、自分の詩を書き、それをインターネットのサイトなどに投稿し、共有する(<https://www.globalvaccinepoem.com/>)。

5.

ロックダウンや自粛生活の時に人が向かうものが文学であるとは限らない。オンラインのビデオ配信サービスを利用して、映画その他のコンテンツを視聴する人もいるだろうし、音楽やエクササイズなどに取り組む人もいるだろう。しかし、パンデミック状況において文学に立ち返る人たちがいたということは、危機の時に少なからぬ人が文学を必要とするということを示唆している。

インターネットの発達によって、巣ごもり状態における交流も時間や空間の隔たりから自由になりつつあるのかもしれないが、家にこもって文学作品を読むことは、移動を制限されることの不自由をプラスに転じる昔ながらの方策に違いない。その古典的方策は今も有効であるようだ。パンデミックの終息がいつになるかわからない今、長編小説を読んだり、詩作に挑戦するといった活動にも目を向けてはどうだろうか。